顆ヲ於遺燼之中ニ又舌根［割注］白色ニシテ而有リ光形如シ一葉蓮華ノ」不レ爛宛然トシテ在リ灰中ニ」（『略記写本』）とある。

この舌根が焼け残るという話は『略記写本』では「多年称名ノ之功一生不虚誑語ノ之徳」と説明している。ところが、「大智度論」（九、『正蔵』二十五、一二七ａ）には阿弥陀仏経を誦するがゆえに「舌不焼」とあり興味深い。

茶毘に付された祐天の舎利は、祐海によって創建された祐天寺と増上寺の廟所ならびに菩提寺最勝院にそれぞれ埋骨された。

さらに『略記写本』によれば、祐天の等身大の影像が造られた。現在祐天寺の本堂に納められているものがそれである。この祐天の像は現在調査中であるが、近世の僧侶しかも祖師でもない僧侶としては考えられないほど多く造られ奉納されている。現在のところを記すと、最勝院・新妻家・水海道市法蔵寺・祐天寺・松阪市清光寺・松阪市西方寺・多気郡宝泉寺に確認されている。まして、その画像や名号まで入れればその遺跡は計り知れないものがあることは言うまでもない。

第七項　祐天の臨終を巡る験益

「浄土本」の伝記にも名号の功徳、祐天の檀度の功をはじめ霊瑞・奇瑞を載せ祐天の徳を

偲んでいる。ここでは、最後に臨終にまつわる験益をまとめ、祐天滅後の事項に関することは紙面を改めることとしたい。

命終のとき、音楽、天華、聖衆来迎などを感じた者も多かったと『略記写本』などに記されているが、それ以外にも個人で感じた奇瑞も伝記中に記されている。

江府本湊町河合氏染レ疾七月十四日戌刻蒙二上人ノ之告一ヲ同十八日正念往生

（『略記写本』）

ここまでならば名僧の往生伝の域を出ないが、祐天の徳を知らしめる出来事が深川の本誓寺で起きた（『江戸浄土宗寺院寺誌史料集成』六一五頁）。興味深い話であり、ここに引用したい。

石地蔵尊縁起

当寺石刻の延命地蔵尊ハ万治三庚子年七月、日本回国の修行者供養之ためとして造立せり、其頃寺は馬喰町に有りしか、天和三年地蔵尊もともに此深川にうつりぬ、かくて正徳弐年本堂・方丈不レ残類焼して時の住持白呑上人千辛万苦してほとなくむかしの如くに建立せしに、享保三年ノ春近火のために一宇も残らす灰塵となりぬ、先の造営より間もなき事なれは白呑上人も今ハ力およハず、すミやかに

隠遁して能き住僧を請せんとおもひ定められ、兼而増上寺御隠居祐天大僧正とふかきよしミあれハ彼庵室ニ行、右の物語りありしに僧正の仰にハ、某おもふ子細のあればいま暫くととまるへしとのたまふに付、はからす月日を送られけるに、同年七月十四日白呑上人をちかく召され、我はほとなく命終する也、建立の事は蓮台上より力をそふへしと仰せられ、御かた身とて御名号壱幅たまハりて帰されぬ、はたして翌十五日祐天大僧正御遷化ありける、その日より俄に貴賤群集して此石地蔵尊を拝するものはなはたおおく、翌十六日よりは夜も門をとする事あたわす、五六日の間に近き田舎の人々までおひたたしく参詣して積年の病の立所に平愈せし、その霊験あまねく人の知る所なり、扨こそ祐天大僧正の仰に存する子細ありとて隠遁をととめ玉ふは、此尊像に御心をこめ玉いしことならんとさとりぬ、明れハ享保四年諸堂十分に建立終われり、世の諺に祐天大僧正乗りうつりの地蔵尊と唱しも此因縁なりとかや、右祐天大僧正御かたミの名号は地蔵堂の前に左り字に刻し、信心の輩にすりあたふるものなり

このように、当時の流行神信仰のような勢いで祐天への信仰が広まり、その書写された名号が仏として扱われ、祐天の身代わりとしての地蔵信仰へと結び付いていったのである。どのような形にしろ、祐天は当時の信仰に一つの時代を形成し、念仏信仰を真に庶民のも

のとし、また単なる隠遁僧にとどまらず将軍家、天皇家までその信仰が及んだという事実を見たとき、「普及本」の伝記ではわからない新たな祐天像というものが形成されなければならない。

第三章　祐天の行蹟に対する一考察

●第一節　祐天の現世利益

第一項　悪霊祓い

第二章において、長々と祐天の生涯を横割りにして見てきた。まだまだ明らかでないことも多く、未調査の史料も残っている。しかしながら、たとえ不完全であっても一度まとめておくことが今後の調査研究へ役立つと信じるものである。

次に、これまでの調査研究の結果から、祐天の生涯を通して見たときにどのようなことが言えるのかを考察しておきたい。